筑波社会科研究　第9号（1990）

「開発」の意味を問い直す教材化の試み

― タイのＮＧＯと農民による農村開発を事例として ―

羽佐田透一*

1．はじめに

これまで、タイ、インドネシヤ、インド、ネパールなどアジアの国々を旅してきて、それが1年間を越えた。調査目的のこともあったが、そのほとんどは気ままなぶらぶら旅行であった。気ままにぶらつく中で、まず感じたことは、「アジアは楽しい」ということだ。それは、もちろん旅すること自体が楽しいということもあるだろう。でも、それよりもそれぞれ現地に住む人々が逞しくしあわせそうに暮していて、それに溶け込もうとする中で楽しさを分けてもらったという面が大きいと思う。日本では、東南アジアとかインドというととかく貧困、不衛生、治安の悪さなどマイナス面が強調されがちである。確かに農村の貧困、スラム、森林破壊など深刻な問題も多い。それらの問題には日本が直接的に、または間接的に関わっているものもあり、問題は問題として考えていかなければならないと思う。また、開発途上国に対するマイナス・イメージの背景には、経済的物質的成長に偏った開発の見方が指摘できる。その開発観を問い直す教材は出来ないものか。また、先に見た両面をうまく接合させた教材は出来ないものか。そういう問題意識を持って、タイのＮＧＯと農民による農村開発の教材化を試みた。

2．開発教育と開発観

今日、我が国では、様々な分野で、「国際化」がしきりに説かれている。教育の分野でも国際理解教育、異文化理解教育、開発教育、環境教育など国際化への対応を目的とした教育の理論化や実践が進められている。しかし、それらの試みの中で、国際化への対応の視点、特に開発途上国との国際化の問題についての視点は明確ではないと思う。開発教育はそのことを重点的に扱うものとして注目されつつある。

開発教育が始められるようになった背景としては、南北間の格差の是正を意図して行なわれた1960年代の「国連開発の10年計画」が不成功に終ったことが挙げられる。この計画の目的は、大規模技術と資本の移転により、経済成長を速めることで、開発途上国の開発を促進することであった。しかし、逆に貧富の差を拡大するという結果を招いてしまった。このため、このような経

＊茨城高等学校

済開発による西欧型の近代化をめざす従来の開発のあり方が見直され、新しい開発のあり方が模索されるようになった。その新しい開発は、「もう一つの開発（Alternative Development)」などと呼ばれる。その考え方を、従来の開発のあり方と対置させて、諸論文を参考にまとめたのが表1である（注1）。このように、開発とは、経済的側面ばかりではなく、住民の参加と自立と

表1　「開発」をとらえる視点

従来の開発観（近代化論）	新しい開発観（もう一つの開発）
①　開発とは、工業化である。そのためには、技術の進歩が必要であり、経済成長こそ目標である。	①　開発は、経済的技術的側面ばかりではなく社会的文化的側面も重視すべきである。
②　開発とは、西欧型近代化である。開発途上国は、西欧先進国がたどったのと同じ発展段階をたどる。（単系的発展段階論）	②　南と北の国々の間や開発途上国内部の格差およびその「中心－周辺」の従属構造の克服こそ開発の中心課題である。
③　開発は、先進国の技術や制度が、開発途上国に普及伝播することによって実現する。（開発伝播主義）	③　開発では、国や地域の条件のもとで民衆の参加による自立自存をめざすことが大切である。

いった社会的側面、および固有の文化の尊重などの文化的側面をふくむものとして考えられるようになった。そして、南と北の国々の間や開発途上国内部の格差とその従属構造の克服が開発の中心課題とされるようになった。その考えをもとに、開発途上国の低開発の原因には、先進国の側にも責任があり、また、先進国内部にも人間疎外や環境破壊などの開発上の問題が存在することが認識されるようになった。そういった開発のあり方の見直しとともに、開発協力への「世論の動員」が重要な課題として考えられるようになった。以上のような認識のもとに、開発教育の必要性が、主として、1970年代から叫ばれるようになった（注2）。

このように開発は、従来の開発のあり方が見直される中で進められてきたものである。その開発教育が目標とするのは、次のようなことである。(1)　政治経済面だけではなく、社会文化面も含めた開発途上国の総合的理解・学習。(2)　身近なところにある南北問題（人権問題、環境汚染、消費生活など）。(3)　低開発あるいは南北問題の諸様相（人権、平和、暴力、貧困、飢餓、人工爆発、環境汚染、疾病あるいは保健衛生、都市のスラム化、地球の砂漠化、文盲、失業、産業貿

易構造、経済発展の格差、累積債務、植民地主義、開発協力など）とその原因の学習。(4)　これらの南北問題を克服するための協力についての研究。(5)　南北問題克服に参加する態度の養成とその行動化（注３）。

上記のことを目標とする開発教育を実践するうえで、私が問題となると考えるのは、開発途上国の総合理解・学習と低開発あるいは南北問題とその学習をいかに接合させるかということであった。というのも報告されているアンケートの結果でも明らかなように、今日の生徒の多くは開発途上国に対して「貧しい」「遅れている」などのマイナス・イメージを持っている（注４）。これは一般の日本人にも言えることだろう。この偏った見方を変えるには社会的文化的側面も含めた開発途上国の総合的理解が必要である。そして、開発途上国にも日本など先進国と同じように人々の生活や文化があり、同じ地球に住む同じ人間なんだという当然のことを理解することが必要である。そのためにも現地にはそれぞれ現地に適した開発の仕方があり、西欧型の近代化のみが開発の仕方ではないことを学ぶ必要があろう。一方で、開発途上国の多くは、現在、低開発に苦しんでおり、南北問題も深刻化している。その問題の解決に参加する態度を育成するためには、問題の現状や原因の理解が不可欠である。だが、このような開発問題を中心とした実践は、生徒たちの開発途上国へのマイナス・イメージを増長させる可能性がある（注５）。これら両方の面からとらえさせることが重要であろう。だが、その両面からとらえた開発途上国像が生徒の頭の中でうまく接合し、肯定的共感的理解や問題解決への積極的態度を引き出すことができるのだろうか。その両面を備えた教材を開発できないものだろうか。そんな問題意識を持っていたときに、私は西欧型の近代化とは異なった「もう一つの開発」が開発途上国のＮＧＯ（注６）と農民によって試みられていることを知った。私は、それを教材として取り上げることで「開発」の意味を問い直し、開発途上国の肯定的共感的理解を計り、問題解決への積極的態度を引き出すような実践ができるのではないかと思った。そこで次に「もう一の開発」の事例を教材として取りあげることでどういう教育目標を達成することが期待できるのかを仮定してみたい。

先にみたように開発観が見直されるようになったのは、従来の開発観に基づいて行なわれた開発途上国の自国の開発や先進国による開発協力の多くが失敗に終ったためである。開発教育の場合には、この開発観の見直しは別の意味も持つ。それは、開発途上国に対するマイナス・イメージの背景には、歴史的に形成された近代化論的な開発観があると考えられるからである。高校生に対するアンケートの結果でも「政治・経済・科学技術などの遅れた貧困な後進国」と認識されていると報告されている（注７）このような認識を変えるためには、その認識の背景となっている開発観を見直させる必要があろう。その点で「もう一つの開発」の事例を教材として学習することは、「開発」のあり方の見直しにつながり、開発途上国に対するマイナス・イメージの見直

しにもつながるのではないかと思う。また、「もう一つの開発」においては、民衆が「開発の主体」であり、その参加と自立が目指されている。それについて学ぶことで南北問題を取りあげるときにありがちな「貧しく遅れた」とか「被害者、犠牲者」という開発途上国の民衆像を変えることができるのではないかと思う。さらに「開発」における社会的文化的側面の強調は、人権問題、環境汚染などの問題において「心の貧しさ」を問われることの多い日本人にとって学ぶことも多いと考える。以上の仮定のもとにタイのＮＧＯと農民による農村開発の事例を分析し、その教材としての有効性を考察してみたい。さらに、開発教育は単に知的理解を目指すものではなく、問題解決に参加する態度の養成とその行動化を目標とするものである。そのため学習方法においても、講義方式だけではなく、ロールプレイング、シュミレーション、ゲーム、コネクションリサーチ、行列表など様々な工夫がされている。本研究においても一農村の具体的な事例を取り上げることやスライドなどの視聴覚教材の使用、さらに討論、ロールプレイングなど学習方法の工夫を検討してみたい。それが、一斉授業による知的注入ととかく批判されがちな社会科教育に対する一つの改善提案になればと思っている。

３．教材事例 —— ノーンヤプロン村におけるＤＡＩＳＡＣＮの開発活動

本章では、当村におけるＤＡＩＳＡＣＮの開発活動について、彼らが開発についてどう考え、その考えをもとにどう活動しているかという観点から見ていく。そして、開発活動を見る前提として、村の抱える問題点とむらの伝統文化・価値観についても概観する。

(1) 調査概略

私が滞在したのは、タイ東北部チャイヤプーン県のノーンヤプロン村だった。バンコクからバスを乗りついで約７時間で郡庁所在地のケンクローに着く。村へは、そこから２日に１度のトラックバスでまた約１時間かかる。村には、54年前に最初に５世帯が移住してきた。そこから、回りの森林を開墾しながら、自然増と移住によって増加し、現在では74世帯430人が住む。この村には、1988年８月に20日間、1989年２月から３月上旬にかけて１週間滞在し、聞き取り調査を行なった。８月は雨期で稲作の農繁期、２・３月は乾季で農閑期であった。最初の調査では東京外語大の杉山さんとワーカーのガイさんに、２回目の調査では当村で実習中のセントルイス看護学校の学生の方に、村人とのコミュニケートなどの面で多大な協力をして頂いた。また、村人たちもとても親切で協力的で、負債など突っ込んだ質問にも嫌いな顔をせずに答えてくれた。私のノーンヤプロン村滞在は、調査を別としても大変楽しいものであった。

(2) ＤＡＩＳＡＣＮの開発観

ＤＡＩＳＡＣＮ（ナコンラチャシマ司教管区センター）は、タイのカトリック系の開発ＮＧＯ

であるＣＣＴＤ（タイカトリック開発協議会）の１部局である（注８）。ナコンラチャシマ、ブリラム、チャイヤプーンの３県内28カ村で開発プロジェクトを持っている。主な活動分野は、農村コミュニティー開発、家族生活促進、青年教育である。当時、女性３名を含む８名のタイ人ばかりのスタッフが働いていた。開発活動の中心は、農村開発プロジェクトでプロジェクトに入る前には調査が行なわれる他、プロジェクトと並行してセミナーミーティングなど農民教育が並行して進められる。（注９）。

ＤＡＩＳＡＣＮは、人間開発を目標にかかげ、農村の伝統的価値観を生かして、外部社会への従属から農民が自立出来るように側面的に援助することを目指している。人間開発とは、経済開発が物質的側面を重視するのに対して、文化的精神的側面をも含めた総合的な人間の幸福を追求するものである。彼らは、負債、土地無農民などの農村問題の原因の一つを市場経済の流入によって、外部社会への依存を深めたことにあると見ている。そこで、民衆の自立のために、様々な問題の原因となっている社会構造や民衆が開発の主体であるという自覚についての民衆の社会意識化がはかられ、伝統的な相互扶助的人間関係が促進されつつ、民衆の組織化が進められる（注10）。次に、この開発観にもとづいて、開発プロジェクトがいかに実践されているかを村の状況を含めて具体的に見てみたい。

(3)　村の抱える問題点

村の生業の中心は稲作である。村長によれば、村の総耕地面積約1500ライ（約240h、１ライ＝0.16ha）の５分の４は水田である。水田では、主に自家消費用のもち米が作られている。余剰米は、１タング（201)当たり30～35バーツ（１バーツ＝約５円、1988年８月当時）で村人やミドルマンに販売される。畑では、野菜の他、換金作物として、キャッサバ、ジュートなどが作られている（注11）。キャッサバは、生のまま又は感想させて売り渡されるが、時期、販売先によって、価格のばらつきが大きく、販売能力が要される。キャッサバは、地方又はバンコク加工され、主に家畜の飼料用としてＥＣ諸国へ輸出される。近年日本への輸出も増加している。このような商品作物栽培の拡大は、農家の現金収入を増加させる一方で、小作物や土地無農民への転落や、森林破壊、土壌の悪化を招くこともあると指摘されている（注12）。

農業上の最大の問題は、雨が不足しがちで、しかも不安定なことだ。ほぼ完全な天水依存の農業であるため（注13）、米の生産量は、その年の雨の状態によって大きく左右される。近村での調査では、豊作年と不作年の間には10倍の変動幅があると報告されている(注14)。 それでなくても土壌がやせているため、米の生産性が低い。１ライ（0.16ha）当たり20タング（約200kg)が目安とされており、それは全国平均の約３分の２である（注15）。これでは、平均的農家でも降雨不調で不作の年には米は自給できないそうだ。特に、ここ２・３年は雨不足だそうで、例年は

6月には田植えが始められるのだが、今年は8月末になっても大部分の水田は乾いたままだった。村人は仕方なく近県へトウモロコシ刈りなどの出稼ぎに出ていた。

農薬が水田で、化学肥料は水田、畑両方に4・5年前から使用されるようになった。化学肥料は、ケンクローから1袋 230バーツで共同購入している。化学肥料は、農業経費中最大のものである（注16）。また、村人のほとんどは自作農であるが、土地を持たない6世帯の農家もある。彼らは小作や農業労働（1日1人20バーツ）、そして出稼ぎなどで生計を立てているが、生活は苦しいようだ。農業経費の増大、消費財の購入の増加によって出費が増え、負債が問題となっている。大土地所有者3名と土地無農民3名の負債を比較すると次のことが言える。前者が土地、機械の購入など生産目的で銀行など公的機関より多額（10000～30000バーツ）の借金をしているのに対して、後者は少額（500～3000バーツ）であるが、米や生活必需品購入のために友人や高利貸しなど私的機関から借金をしている。私的機関の利子は、日利5％、年利50～70％と銀行の年利12％よりもかなり高く、負債目的と考えあわせても土地無農民への圧迫のほうが強いと思われる。出稼ぎも盛んである。特に、毎年農閑期の1月～4月中旬には村人は一斉にタイ西部のカンチャナブリへさとうきび刈りにでかける。1989年3月には、村人の約半数に当たる220名あまりが出かけていた。長期の出稼ぎには、子供も含めた家族全員で出かけるため、児童の就学に支障が出るなどの問題が起こっている。またバンコクなど都市への出稼ぎは一般的ではないが、出稼ぎの恒常化→都市への移入→不完全就業は、大きな社会問題となっており、この村にもそのような問題が波及することも考えられる。

負債や出稼ぎなど問題に拍車をかけそうなのが、1987年11月の電化である。この村は、まだ自給自足的性格が色濃く残っており、機織り、日用生活具作りや、自家消費用の米・野菜の栽培も行なわれている。しかし、電化以後、照明器具だけではなく、テレビ（13軒）、ラジカセ（10軒）扇風機、冷蔵庫など電化製品を持つ家庭が急速に増えている。テレビは、娯楽、情報の提供などプラス面も多いのだが、1台5000～8000バーツのものの購入は平均的年間農業収入が、10000バーツ程度のこの村の農民にとっては過重な負担と思われる。このことをワーカーのガイさんも憂慮していた。

この村の社会基盤はまだまだ未整理である。市場や病院のあるケンクローまでは、2日に1度トラックバスが走っているだけだし、上下水道もない。村内には小学校はあるが、中学校へは5km離れた村まで通わなければならない。現在、小学校へは就学年齢の子供全員の75名が、中学校へは5名が就学中である。これまでこの村から高校へ進学した者はいない。

以上みたように、この村の最大の問題は、灌漑施設がないために雨の不足と不安定性による稲作への影響が深刻化しつつあることである。また、負債や出稼ぎの問題も、化学肥料の使用の増

大や消費生活の浸透などによって、顕在化することが懸念される。

(4) 村の伝統文化・価値観

ＤＡＩＳＡＣＮは、開発において文化面を重視している。ＤＡＩＳＡＣＮのディレクターのソムチャイ神父は、「互恵主義、質素、平和愛、まとまり、相互扶助などのタイ農村の伝統的な良き価値観は、民衆の日常生活によく表われている。人間開発では、これらの価値観を強化し、村人の開発への自助能力を高めていくことが目指されている。」と言っている。ＤＡＩＳＡＣＮは、コミュニティー分析によって、伝統的文化・価値観を明確化し、プロジェクトや農民教育によって促進している。

村人の多くは仏教徒であるが、ピー（精霊）の信仰も根強く、また16世帯にわたって40人のカトリック信者もいる（注17）。村には，寺院、サーン・ター・プー（部落神の祠）、教会が一つずつある。だが、カオ・パンサー、オーク・パンサーなどの仏教儀礼の時には、カトリック教徒も協力している。このことについてガイさんは、「宗教を越えて、村人が助けあっている例であり、まとまり、相互扶助など村人の価値観の表われである。」と説明した。

ここでは、開発活動との関連で呪医の例を出す。呪医には、ピー信仰にもとづくものと、仏法にもとづくものがあるそうだが、この村の呪医は後者である。チャーリーという名の60才の老人で、この村の長老格である。彼は、25才の時に興味を持ち、隣村の寺院に通って、僧侶から習った。彼は仏法のみを信じ、精霊、悪霊は信じない。また、不殺生や毎日と仏教日の読経など僧侶に準じた生活をしている。彼は、病因を煩悩にあると考える。そこで、実際の病気、ケガには、薬草から作った薬をあげ、精神面での治療として、綿糸を患者を安心させるために手首に巻いてあげる。治療費は、薬代が高いもので10バーツ（約50円）、おまじないに対しては１バーツ（約５円）のお布施をもらうのみだ。もっとも、お金がなければ、お礼の言葉のみでもよいとのことだった。ソムチャイ神父は、このような呪医の存在は村の相互扶助の典型の一つだとして次のように説明した。「呪医は、化学薬品を与え、高い治療費を取って利潤を追及する都市の医者とは大きく異なる。村は、本来、お金を媒介としない互酬で成り立っていた。村人は、自分の持っているもの、自分のできることを分かち合って、共に生きてきた。」。また、田植え、稲刈りなどの手伝いや、手製の篭、絹布の授受、儀礼時の協力などは日常的に行なわれているようである。

(5) 農村開発プロジェクト

ここまで、開発活動を見る前提として、ＤＡＩＳＡＣＮの開発観、村の伝統文化・価値観について概観してきた。次にそれらのことと関連させながら、農村開発プロジェクトの目的や実践などについてみていく。

ノーンヤプロン村の農村開発プロジェクトは、ガイさんという若い女性のワーカーが、1987年

10月から担当している。調査当時、チャイヤプーン県内の９ヵ村が彼女の担当であった。この村では、その他、ワーカーのレックさんが家族生活促進のプロジェクトを受け持ち、ソムデット神父が信仰、人や物資の輸送を補助している。現在、進められているプロジェクトは、米銀行、水牛銀行、池掘りの三つである。

このうち最も進んでいるのが米銀行である。この村では、雨の不調の年には食べる米にも困る村人が多く出て、彼らは高利貸しなどから高利の借金をして、米を購入していた。そこで、農民組織を作り、メンバー間で米を貸借し、借金への依存から抜け出そうというのが、このプロジェクトの第一の目的である。米銀行は、５年前に、村人の有志が教会の敷地内に米倉庫を立て、参加希望者から提出された米とＤＡＩＳＡＣＮから貸与された5000バーツで買った米を集めて始められた。備蓄された米は、稲作期（５月～10月）の間、米の不足するメンバーに貸しだす。そして、収穫後直ちにグループへ20％の利子を付けてモミ米で返済する。現在、メンバーは35世帯で、５人の委員会員が中心となって運営されている。貸出制限量は、家族成員一人につき10タング（約100kg）までで、メンバー以外には利子30％で貸し出す。

このプロジェクトでは、村内の問題の解決に相互扶助の精神を生かし、それを促進することが目標とされている。その例として次のことがあげられる。米を借りる必要のないメンバーが，貸出制限以上の米を必要とするメンバーに、自分の貸出量で借りてあげている。また、メンバーでない村人や他の村の人にも同じように貸している。委員会は貸出業務を奉仕で行なっており、報酬はない。さらに、村人の組織化を進め、自立を計ることも目標とされている。その点、運営は委員会を中心としたメンバーに任されており、ガイさんは、ミーティングや日常生活の中でアドバイスをするのみである。1987年10月にガイさんが来るまでの２年間は、ＤＡＩＳＡＣＮのワーカーは村には来なかったが、その間、村人だけで自主的に運営されていた。委員会は、余剰米を売却しながら、ＤＡＩＳＡＣＮから貸与された資金を分割返済している。譲与ではなく貸与であるのも民衆組織の自立を配慮してのことである。ＤＡＩＳＡＣＮは、このように村人やその民衆組織の自立を側面的に援助している。（注18）

次に、水牛銀行についてみてみる。このプロジェクトは、水田の耕作用として村人の生活に不可欠な水牛を購入する資金を貸与するものであり、1988年５月に開始された。発足時に、米銀行グループが的確であると認めた村人６家族に、水牛を購入する資金として6000バーツずつ貸与した。貸与された資金は、現金で毎年1000バーツずつＤＡＩＳＡＣＮに返済される。水牛が子供を産むと、１頭目はグループのものとなり、２頭目以降は、お雇い牛の所有者のものとなる。グループの所有となった水牛は、水牛銀行プロジェクトの拡大のために利用される。

ＤＡＩＳＡＣＮの旧局長であるソムチャイ神父は、水牛銀行プロジェクトの目的について次の

ように説明した。「水牛銀行の目的は、地域で得られる資源の活用により、農民の自立を計ることにある。農民はこれまで水牛耕作という伝統的技術で農業を行なってきたが、市場経済の影響が農村に及ぶと、水牛耕作を遅れたものと考えるようになった。そして、農民の多くは、耕運機の使用を望むようになった。だが、耕運機は高いし、燃料費もいるし、修理代もかかる。それに対して、水牛は草を食べさせればよいし、子供を産んで利益になるし、糞は肥料にもなり、水牛のほうがタイの農民にとって適していると考える。そこで農民に情報を提供し判断してもらう」。ここには、伝統的土着的技術への信頼という適性技術の思想がみられる。それとともに情報を提供することによって農民の意識化を進め、外部社会の影響に対する農民の自立をはかるという意識化の観点が見られる（注19）

最後に池掘りプロジェクト（注20）についてみてみる。このプロジェクトは，農民生活に有用な池を掘るための資金援助をするものである。1987年12月に開始され、調査当時までに９家族によって九つの池が掘られていた。池は、魚、カエル、カニ、水野菜のような自然食料の供給源となり、農民の食事の副菜の補給に役立つ。これは、市場で食料を買うのでなくて、地域の資源で生産できることに大きな意義がある。また、田畑へ給水するための水源としての意義もある。そこで、ＤＡＩＳＡＣＮは、米銀行グループによって適格とされた農民に対して、3000バーツを貸与して、池掘りを奨励する。池を掘るのに３ヵ月から４ヵ月かかるので、この資金はその間の生活資金として使われる。資金は無利子で毎年1000バーツずつＤＡＩＳＡＣＮに返済することになっている。水牛銀行と同じく、地域で得られる資源を最大限活用することにより、市場経済への依存を少なくして、農民の自立を促進するという意義をもっている。

そのほかのこの村での開発プロジェクトの事例としては、政府の無償援助で1986年に造られたダムがある（注21）。250000バーツ（約1250000円）かけて造られたダムであったが、雨季でも降雨が不足すると機能しなくなる不完全なもので、調査当時も水不足で用をなしていなかった。

４．教材事例 —— ＤＡＩＳＡＣＮとノーンヤプロン村の開発

(1) 教材観

ここでは前節で見た研究事例を第２節で提示した仮定について検証し、「開発」の意味を問い直す教材としての有効性を考察してみる。

まず、「開発」のあり方の見直しにより、開発途上国にたいするマイナス・イメージを見直すという点ではどうであろうか。これまで見てきたようにＤＡＩＳＡＣＮの開発活動は、農村の伝統的価値観を重視していること、外部経済への依存を深める市場経済の流入に対して批判的であること、そして、民衆の参加による自立自存を目指していることなど「もう一つの開発」として

の要素を備えている。「貧しい」「遅れている」などのマイナス・イメージの背景には、「開発」とは西欧型近代化であり、開発途上国は、西欧諸国がたどったのと同じ発展段階をたどる」という見方があることは先に見た。その点でＤＡＩＳＡＣＮの開発活動は、もう一つの新しい開発のあり方を求めるものであり、マイナス・イメージの克服に効果を持つことが期待できる。市場経済が自給自足的農村へ流入することは外部経済への依存を深めるものだとするソムチャイ神父の批判的見方は西欧型の経済発展の見直しを表わすものである。水牛銀行、池掘りにおいて地域の資源や伝統的土着的技術を活用することによって市場経済への依存を少なくすることが意図されていることなどもこれに合致するものである。次に検討する二つの仮定もＤＡＩＳＡＣＮの活動と「もう一つの開発」との関連を見るものである。

次に、民衆が「開発の主体」として位置付けられていたかどうかを検討してみる。ＤＡＩＳＡＣＮの開発活動では、米銀行などのプロジェクトが、村人の組織によって自主運営されており、村人の経済的社会的自立が目標とされていた。ＤＡＩＳＡＣＮおよびワーカーの役割りが、農民の自立を側面的に援助する事とされているのも仮定に合致する事例である。本論文では詳しく触れなかったが、セミナーやミーティングなどで社会問題の原因や開発の主体としての自覚についての意識化が計られている。「開発の主体」としての民衆像は、「貧しく遅れた」人々や「被害者」「犠牲者」というイメージの克服が期待できる。

研究事例では、伝統文化・価値観が重視されていた。例えば、ソムチャイ神父は、「互恵主義、質素、平和愛などの伝統的な良き価値観を強化し、村人の開発への自助能力を高めていくことを目指している」とＤＡＩＳＡＣＮの開発における文化面の重視を唱えていた。相互扶助などの伝統的価値観を表わすものとして呪医の存在が注目されていることや米銀行プロジェクトにおいて相互扶助の促進が意図されていることはその実例である。ここであげられている伝統的な良き価値観や相互扶助などは、日本が発展過程で軽視してきて今では失われたか、あるいは失われつつあると一般的によく言われるものである。日常の助け合い、地域のまとまり、肉親の絆、老人や子供などの弱者保護など「心」の開発は、むしろ日本人のほうが学ぶべきことだろう。

以上の考察から、第三節で取り上げた研究事例は、「開発」の意味を問い直す教材としての要素を備えているといえよう。

(2) 教案事例

次にあげるのは、本研究で取り上げた教材事例を使って実際に授業の教案を作ってみたものである。これは、1989年9月23〜25日に東京ＹＭＣＡ妙高高原ロッジで開かれた開発教育セミナーで実施した模擬授業の教案をもとに作成した。

テーマ　「水不足の村の村民会議」

① 目標

1) ダム、ポンプ、耕運機などに表わされる近代化という開発のあり方と溜め池、水牛、米銀行に表わされる「もう一つの開発」のあり方の対比から、「開発」の意味を考える。

2) ロールプレイングによる討論を行なうことによって村人の生活や農村問題についての共感的理解を計る。

② 指導計画

	時間	学　習　活　動	留　意　点
導入	5分	タイの農民はどんな問題を抱えていると思うか？ ―― 借金、重い年貢、貧困、低い技術、低い収穫量など。 その問題解決のためにはどうすればよいだろうか？タイのある農村を例にして考えてみよう。	これまでの学習をもとに生徒に発言させ、それをまとめる。
	7分	1．スライドで農村の概要、農業、水不足などの問題点について説明する。 ①ノーンヤプロン村全景　⑦個人用溜め池 ②稲作・田植え　⑧水牛 ③キャッサバ畑　⑨農民グループ ④水のない水田　⑩米銀行倉庫 ⑤ホンプ耕運機　⑪村長 ⑥使われていないダム　⑫村民会議	後のロールプレイングがしやすいように農村のイメージをつかませる。
	8分	2．プリントで村民会議の場面設定および役割分担を説明し、役割を決める。 村民会議のテーマ ―雨不足に対して政府に資金を貸与してもらってダム拡張し、同時にポンプと耕うん機の導入によって村を発展させようという村長の提案についての討議。	プリント ―農村概要、地図、生業，村民会議のテーマ、役割性格付け。

	20分	役割 ― 村長、長老、地主、小農、主婦、ワーカー。 3．討議 各役割担当者は、役割シートに書かれた各自の意見に基づいて討議をする。	役割シート ― 村民会議のテーマに関する各自の意見がまとめてある。
整理	10分	1．各グループの討議の内容を発表する。 2．評価表に記入する。 開発についての考え、役割について。 3．「開発」については大きく分けて二つの考え方があることを表にまとめて提示する。	評価表 「開発」の考え方の表。

③. 適応単元（注22）

・高校地理歴史科　地理Ａ　⑶　イ　諸地域から見た地球的課題

― タイの村から見た南北問題・開発問題

地理Ｂ　⑵　人間と環境

自然環境と開発のあり方

・高校公民科　現代社会　⑷　国際社会と人類の課題

主題学習　南北問題 ― その克服のための開発途上国の人々の努力

中学校　地理的分野　⑴　世界とその諸地域 ― 東南アジアの農村問題

⑶　国際社会における日本 ― 国際協力のあり方を考える

公民的分野　⑵　国民生活の向上と経済　ウ．経済生活と国際協力

④. 考察

この授業がうまく行くかどうかは、ロールプレイングによる討議で生徒たちがどこまで村人の立場にたって考え、発言できるかにかかっている。そのためには、スライド、プリント、役割シートなどで簡潔に討議に必要な情報を提供することが肝要である。村や村人の写真、村の地図、ダム・耕うん機・ポンプ・米銀行・溜め池・水牛などの経済効果などの情報はとても有効であろう。この教材は、タイの農村滞在の経験のない人には使いにくい面もあるだろうが、各自の経験・生徒の状態に合わせてやりやすいように自由に工夫して使ってくれればよい。

５．まとめ

仮定の検証でみたように、本研究で扱った教材事例は、開発途上国に対するマイナス・イメージの克服、開発途上国の民衆に対する肯定的な見方の養成、途上国に学んで自らの生活を見直す態度の育成の点で、「開発」の意味を問い直す教材としての有効性を持つと考えられる。そして、その有効性を生かすためにも、本研究の教案で上げたロールプレイングのような学習方法の工夫によって、共感的理解を計ることが重要である。これは、開発教育の教材として「もう一つの開発」の事例を取り上げた場合に一般化できよう。また「もう一つの開発」の事例の教材化は、「開発の問題点追及」と「開発途上国理解の促進」という開発教育の二つの方向性をつなぐものとして期待できると思う。今後は，私たちの身近かなところとの結び付きをより重視した教材研究をする必要があろう。また、教材事例を使って授業を作り、実践し、その教育効果を検証してみることも必要であろう。これらの点は、今後の研究課題としたい。

注

(1)　この表は、主に室靖「国際開発における新動向と80年代の開発協力」、『国際開発論 ― 国際開発論　64』　国際政治学会　1984年、および武者小路公秀「現代における開発と発展の諸問題」　川田ただし、三輪公忠『現代国際関係論』　東大出版会　1980年ｐ153～183を参考にして作成した。

(2)　開発教育の誕生と開発のあり方の見直しの関連については、開発教育カリキュラム研究会「開発問題学習カリキュラムの構造」　開発教育実践研究会『第三世界と日本の教育・開発教育基本文献集１』1985年Ｐ27～28、および田中治彦「日本における開発教育の現状と課題」上掲書p73～75参照。

(3)　開発教育協議会『開発教育ハンドブック』1985年　ｐ２参照。

(4)　城戸一夫「高校生のアジア認識」、村井吉敬、城戸一夫、越田稜『アジアと私たち』三一書房　1988年　参照。城戸氏らの調査は、1984年２月を中心とする時期に全国各地四四校にわたる3829名の高校２年生を対象として行なわれた。それによると「アジア」という言葉から連想することを自由表記させたものの集計結果は次のようになっている。１位「貧困，飢餓，食糧不足」18.6％、２位「発展途上国、後進国、未開発、遅れている」16.3％、３位「広大、大陸」8.3％、４位「難民」6.5％、５位「黄色人種」5.6％。

そのほか赤石和則「開発問題・南北問題に対する高校生の意識に関するアンケート調査 ― 我が国の開発教育についての一考察 ― 」、東和大学紀要　№7　1981年　ｐ１～10参照。赤石氏の調査は、1980年に都内三校の1001人の高校生を対象として行なわれた。それによると、

「『開発途上国』という言葉から何を連想しますか？」（全６選択肢，複数回答）という質問に対して、１位「産業・工業が発達していない」69％、２位「多くの人々が貧しい生活をしていて、栄養不良も多く不衛生で病気が多い」60％、と答えたものが多かった。

(5) 金谷敏郎「開発教育とは何か？」開発教育実践研究会　前掲書ｐ135，および甲斐田万智子「私の進めたい開発教育」　同書ｐ92～93参照。両論文では，貧困や飢餓を強調する学習が、子供達に開発途上国の人々に対する同情心、憐れみを植え付ける危険性について言及されている。

(6) ＮＧＯとは、Non- govermentalor ganizatonの略で、直訳すると「非政府組織」または「民間団体」となる、それは「非政府、自律的、非営利という性格を持ち、組織化された集団」を指す。国際協力推進協会『途上国の民間公益組織（ＮＧＯ）実態調査』1985年ｐ２～３参照。

(7) 城戸一夫　前掲論文ｐ47～51参照。そこでは、アジアを後進国とする理由についての答えの分析から「政治・経済・科学技術の立遅れ」＝前近代的後進性＝アジアという意識構造を浮かび上がらせている。

(8) ＤＡＩＳＡＣＮとは、Diocesan Social Action Center Nakhon Ratchasima の略でナコンラチャシマ司教管区センターと訳される。ＣＣＴＤとは、The Catholic Council Of Thailand For Develop mentの略で、タイカトリック開発協議会と訳される。ＣＣＴＤは、1975年にタイ各地に10のＤＡＩＳＡＣを持つ現在の組織形態に整えられた。タイには、ＣＣＴＤのような開発に係わるＮＧＯが115団体ある。

(9) ＤＡＩＳＡＣＮの報告書（1988年８月２日）より。

(10) ＣＣＴＤ　ＮＥＷＳ　ＬＥＴＴＥＲ　jan -feb ,mar-jun 1983,sep -oct1985 参照。

(11) キャッサバ栽培は、60年代半ばから70年代半ばにかけて、東北部に拡大し、70年代後半には全国の作付面積の６割以上を占めるようになった。Statistical Year Book Tailand 1985～86参照。

(12) 北原淳『開発と農業』世界思想社　1985年　ｐ97参照。

(13) タイ東北部の水田潅漑率は、4.4％に過ぎず、全国の18.8％や、中部の44.6％と比べて非常に低い。北原淳　前掲書ｐ85参照。

(14) 海田能宏、星川和俊、河野泰之「東北タイ・ドンデーン村；稲作の不安定性」『東南アジア研究』　第23巻３号　1985年12月　ｐ253 参照。

(15) Statistical Year Book Thailand　1985～86参照。チャイヤプーン県のライ当たり平均生産量は、250.0kgでタイ全国の下から２番目。全国平均は、ライ当たり320.13kgである。

(16) 北原淳編『タイ農村の構造と変動』勁草書房　1985年　ｐ144 ～145 参照。

(17) タイ全国では、上座部仏教徒95％、イスラム教徒約４％、キリスト教徒約0.6 ％である。バ

ンコク日本人商工会議所『タイ国経済概況　1986～87』ｐ35参照。

⒅　米銀行については、国際協力推進協会　前掲書ｐ109 およびＣＣＴＤ　News Letter No.１－２　1984　ｐ５～７（邦訳ＲＡＳＡ訳『開発はだれのもの？』イエズス会社会司牧センター委員会事務局　1988年　ｐ18～26）参照。

⒆　水牛銀行については、‘Buffaroes or Power Billers, Chois of Dignity or Survive ＣＣＴＤ　News Letter No.6　nov.-dec. 1986　参照。

⒇　池の大きさ　10m×12m×深さ２m。ＤＡＩＳＡＣＮの報告書より。

(21)　タイ政府は、1975年から村落レベルの開発事業を資金援助する「タンボン計画」を実施している。このダム建設も同計画による。　北原淳『タイ農村の構造と変動』勁草書房　1987年　ｐ173 ～196 参照。

(22)　文部省『高等学校　学習指導要領』『中学校　学習指導要領』平成元年３月、および開発教育実践研究会　前掲書　ｐ25～52参照。

主要参考文献

赤石和則　「開発問題・南北問題に関する高校生の意識に関するアンケート調査 ― 我が国の開発教育についての一考察 ― 」　東和大学紀要　No.7　1981年

綾部恒雄、永積昭編　『もっと知りたいタイ』　弘文堂　1982年

海田能宏、星川和俊、河野泰之「東北タイ・ドンデーン村；稲作の不安定性」『東南アジア研究』第23巻３号　1985年

開発教育協議会　『開発教育ハンドブック』　1985年

開発教育実践研究会　『第三世界と日本の教育 ― 開発教育基本文献集１』1985年

北原淳　『開発と農業 ― 東南アジアの資本主義化』　世界思想社　1985年

『タイ農村の構造と変動』　勁草書房　1987年

国際協力推進協会　『開発教育に関する調査研究 ― 学校における途上国・南北問題の学習の実態』　1986年

『途上国の民間公益組織（ＮＧＯ）の実態調査』　1985年

Ｂ・シュナイダー、田草川弘訳　『裸足の革命 ― 自立を目指す第三世界の農民たち』

タイ・カトリック開発協議会編、ＲＡＳＡ訳　『開発はだれのもの？ ― タイ・カトリック開発協議会の１０年』イエズス会社会司牧委員会事務局　1985年

パウロ・フレイレ、小沢有作他訳　『非抑圧者の教育学』　亜紀書房　1979年

Ｈ・Ｌ・パーキンス編　三矢亜矢子編訳　『アジアにおける開発の手引き』アジアキリスト教協

議会（ＣＣＡ）　日本クリスチャンアカデミー
初瀬龍平編　『内なる国際化』　三嶺書房　1985年
水野浩一　『タイ農村の社会組織』　創元社　1981年
武者小路公秀　「現代における開発と発展の諸問題」、川田ただし・三輪公忠『現代国際関係論』
東大出版会　1980年
村井吉敬、城戸一夫、越田綾　『アジアと私たち ― 若者のアジア認識』　三一書房　1988年
室靖「国際開発における新動向と80年代の開発協力」、『国際開発論 ― 国際開発論64』　国際
政治学会　1984
諸富忠男編　『タイ国経済概況　1986～1987年版』　バンコク日本人商工会議所　1987年
ワリン・ウォンハンチャオ・池本幸生編　『タイの経済政策 ― 歴史・現状・展望』
アジア経済研究所　1988年

CCTD NEWS LETTER
"RURAL LEADER" sep.-oct.,1985
"CCTD ON THE WAY TO DEVELOPMENT" jan.-feb.,1983
"NON GOVERNMENT ORGANIZATION AND THAI DEVELOPMENT" mar.-jun.,1983
Intercensal Survey of Agriculture Cangwat Chaiyaphum 1983
Seri Phongpit, Robert Bennoum
BACK TO THE ROOTS RUDOC VIP, 1986
Statistical Year Book Thailand 1985-1986
TVS(Thai Volunteer Service) Directory Of Non-Government Develop-ment Organizations
In Thailand 1987

「水不足の村の村民会議」討論資料

(1) 村の概要

チャイヤプーン県ケンクロー郡ノーンヤプロン村。この村は、「タイの最貧地帯」とも言われる東北地方の一農村である。約50年前に最初に５家族が移ってきて以来、森林開墾を進め、現在74世帯430人が住んでいる。村人のほとんどが上座部仏教徒であるが、少数のカトリック信者もいる。

(2) 生業

中心は、自家消費用のモチ米作りで、農地の４分の３は水田である。例年５月の雨季の始まり

とともに田植えをし、10月に稲刈りをする。そのほか、換金作物としてキャッサバ栽培も普及しつつある。最近、化学肥料の使用料が増加。農閑期の1月から4月中旬には、村人の半数近くが、サトウキビ刈りなどの出稼ぎに行く。

(3)　村の抱える問題

①　雨が不足しがちで不順。潅漑施設がないために収穫不安定。

②　化学肥料の使用や、電化（テレビ、ラジカセ、扇風機など）に伴う消費生活の浸透によって、出費・負債増。

③　出稼ぎの増加。子供の教育に障害。共同体の崩壊の危険性。

④　舗装道路、上下水道などの社会基盤未整備。

(4)　これまでの開発プロジェクト

市民団体によって、米不足を村内で補いあう米銀行、水牛の飼育・使用を奨励する水牛銀行、魚・野菜の育成のための溜め池掘などのプロジェクトが進められている。3年前に政府の援助でダムが建設されたが、規模が小さいため機能していない。

(5)　村民会議のテーマ

政府からダム拡張への 1000000バーツの資金援助（無償）の話あり。ただし、用水路建設、ダムの維持費は村の負担。村長は、同時に有償援助を受けて、水汲みポンプと耕うん機を導入して、村の発展を図ろうと提案。

(6)　プロフィール

①　村長（ラーン）　48才、9人家族、40haの田畑、村全体の発展を強く願っている。

②　長老（カンパ）　61才、12人家族、25ha田畑、村人の相談に乗り、尊敬を集めている。

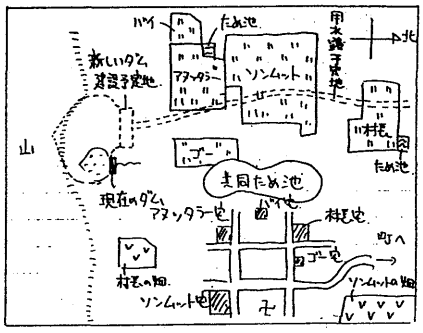
③　地主（ソンムット）　42才、10人家族、160haの田畑、村一番の長者。

④　小農（バイ）　37才、13人家族、2ha、多くの家族を抱え生活苦しい。

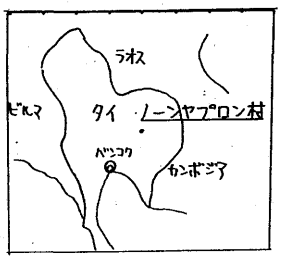
⑤　主婦（アヌッタラー）　28才、7人家族、15haの田畑、家族の健康と幸福を願う。

⑥　ワーカー（ガイ）　26才、バンコク出身の大卒の女性、市民団体スタッフとして村人の自立のために尽力。

ノーンヤプロン村の地図



ノーンヤプロン村の位置



役割シート

村長（ラーン） 大規模プロジェクトを持ってくることは次の選挙でも有利だ。村の農業を近代化して、村全体の収穫を上げ、豊かにしたい。	長老（カンパ） 溜め池、水牛など伝統的なやり方を生かし、質素な暮しをして、公平に豊かになることが大事だ。
地主（ソンムット） ダム、ポンプ、耕こう機すべて賛成である。土地と資金を生かして、更に収穫をふやしたい。	小農（バイ） ダムができても自分の田には利益はない。今でも生活は苦しく、お金のかかるやり方には反対だ。
主婦（アヌッタラー） 作物が今よりも取れ、出稼ぎに行かなくてよくなると良い。ダムよりも水道、道路、病院を望む。	ワーカー（ガイ） ダム建設や、ポンプ・耕うん機の導入は、後の負担のことも考えて、慎重に対処すべきだ。早急な発展は、村内の格差を広げる。